

愛宕信仰の地域的展開―宮城県白石市周辺を中心に―

原島 知子

一 火伏信仰と軍神信仰

京都周辺で、火事から護ってくれる神と言えば「愛宕さん」の名が出てくる。「愛宕さん」とは、京都市の西北に位置する愛宕山、及び山頂の愛宕神社に対する、親しみを込めた呼び方であり、各家の台所には必ずといってよいほど「火迺要慎」^{ひのようじん}と書いたお札が貼つてあるなど、人々にとつてとても身近な存在である。

ところがこの愛宕さん、戦国時代は、本地仏^{ほんじぶつ}を勝軍地蔵^{しょうぐんじぞう}とすることから、戦に勝つための軍神として信仰されてきた。例えば、明智光秀^{あけちみつひで}は本能寺の変の数日前に愛宕山へ籠り、御籤^{みくじ}をひいて、戦勝を祈願したといい、他にも多くの戦国武将が愛宕社を信仰した。加護を願つて武具に「愛宕山大権現」などと刻む例も見られ、中でも著名なのは、片倉家の黒漆五枚胴具足^{くろつるしごまいどうぐそく}(仙台市博物館蔵)で、前立に「愛宕大権現守護所」と書かれた朱札をつけている。片倉家は、伊達政宗^{だてまさむね}の重臣として知られる片倉景綱^{かたぐらかげつな}よりはじまる家で、甲冑は景綱の息重綱^{しげつな}のものと伝承されている。⁽¹⁾京都の愛宕山は、江戸時代に入ってから、軍神信仰から火伏信仰に転化し、庶民の篤い信仰を集めるようになったのである。

愛宕神社は、神社本庁で把握しているだけでも、本社・境内社合わせて千五百社余り存在している。分布域にはばらつきがあり、関西圏の他、北関東から東北部にかけて特に多い。その勧請年代も様々で、江戸時代のものもあれば、戦国時代以前の由緒を持つものもある。さて、江戸時代以前よりあるとされる愛宕神社の信仰はどのようになっているのだろうか。京都の愛宕山のように、火伏信仰への転化をしているのだろうか。今回、軍神としての愛宕信仰を篤く行つた片倉家の旧領白石市周辺の愛宕神社について、二〇〇五年二月四日から六日にかけて調査を行つた。この成果をもとに、白石周辺の愛宕信仰についてまとめてみたいと思う。

二 片倉重綱と愛宕信仰

まず、対象とした片倉家の愛宕の神に対する信仰をみてみると、片倉重綱は大坂の陣の際、病床にあつた父景綱に代わつて、先陣をつとめることとなる。出陣に望んだ片倉家中の軍装は、『片倉代々記』慶長十九年十月十一日条に「馬上六十騎、金の愛宕の札を前立物として面々の旗を指す、歩小姓百人朱の尖笠を冠り、白布の単羽織後に愛宕山大権現守護所と大字に書き、惣地に心経観音経を細字に書たるを着し」とあり、騎馬武者六十騎は甲冑に金の愛宕の札の前立てをつけ、歩小姓は背に「愛宕山大権現守護所」と大書した^{ひとえはちり}単羽織を着た。重綱は、出陣の途中、老婆に会つて愛宕山大権現の御神体を献じられたり(『老翁聞書』)、着陣後も夢に猪に乗つた愛宕山の天狗、太郎坊があらわれ、陣を変えるようお告げがあつたりと、さまざまな靈験を受ける⁽²⁾。また片倉家の旗印として著名な、黒釣鐘紋旗^{くろつりがねもんき}の上部には、京都の愛宕山のお札「愛宕大権現守護所」の朱札と、声聞地蔵^{せいもんじぞう}・不動^{ふどう}明王^{みょうおう}・毘沙門天^{びしゃもんてん}の姿を描いた三尊図像の札が刷り込まれている。文献は残されていないが、出陣前に愛宕大権現

愛宕信仰の地域的展開

の加護を願ってつけてもらったものだと考えられる。

『片倉代々記』寛文五年条によると、重綱は元和元年（一六一五）、大坂出陣に際して京都の愛宕山に参詣して戦場の武運を祈り、道明寺口岡原の戦いにて後藤氏・薄田氏を討ち取るなどの戦功を挙げることができた。そして帰陣後、お礼のため参詣して絵馬を掲げたという。絵馬の銘文には「奉納立願成就之所 元和元年乙卯五月二十四日 願主片倉小十郎重長³」と書かれ、戦勝祈願成就の記念として掲げられたことが分かる。絵馬奉納に関して、宿坊としていた教学院より、戦功のお祝いと絵馬奉納のお礼の書簡が寄せられている⁴。この絵馬は現在も京都の愛宕神社の本殿奥にあり、損傷するごとに片倉家の指図で補修が行われ、江戸時代を通じて片倉家と愛宕山との関係が継続されたことがうかがえる。

また、重綱は領内にあった愛宕社を城下に移転もしている。『刈田郡宮村風土記御用書出』には旧社地宮町西里山松木立の項に、「一愛宕社跡 右ハ往古愛宕社相建候処、小十郎様御先祖備中守様重長公大坂御陣之節、京都愛宕郡愛宕社江御立願有之御成就二付、其後寛永九年之頃当郡蔵本村江御移被成置候由申伝候事」と書かれ、もともとあった愛宕社を大坂の陣の戦勝祈願が成就したので、寛永九年（一六三三）に城下の蔵本村へ移したとある。この愛宕社は『片倉小十郎領分風土記御用書出』によると、南北十間・東西七間の社地を与えられ、南向三間四方の社が建てられていた。別当は本山派の千手院で、毎年六月二十四日を祭礼とし、神事の際は不断組から十人ずつ警固役が出されることになっていた。また愛宕社がある山を愛宕山と称し、三代景長の時代に片倉家の廟所も置かれることとなる。

元禄十六年（一六九三）六月二十四日に再建された折の棟札には、「建立意趣」として「天長地久・社壇安全・大檀那武運長久・一門繁栄・城下堅固・下中静謐」と書かれ、一般的な神仏への願いに加え、武家らしく武運の長

久や城下の堅固が挙げられている。このように、愛宕の神は片倉家にとっては特別な神であったことがうかがえ、そのため社も居城の近くに移し、また神事には警固役を出したと考えられる。

三 片倉家領の愛宕神社

では、藩主片倉家が大事にしていた愛宕社は、領内にも広がっていたのだろうか。宮城県の神社を記載した『宮城県神社名鑑』には、現白石市内の愛宕神社の記述は一切ないが、白石市文化財保護委員の中橋省吾氏によると、小字名として「愛宕」とつく地名がいくつもあり、近世に領主の神として祀られた愛宕社が、領内に広がったものではないかと推測されている。『白石市史』の地名調査⁽⁶⁾によると、「愛宕山」「愛宕」(上齋川・中齋川・鹿子字切図)、「愛宕山」「愛宕下」(越河・五賀・平字切図)、「愛宕」(三沢・大町・鷹巣字切図)と、二十二村中五ヶ所に「愛宕」の名称が見受けられる。小字名には挙がっていないが、現在も祀られている小原地区の愛宕神社を実際に訪れてみた。白石市小原地区新町にある愛宕神社は、小高い山の上⁽⁷⁾にあり、小さな石の祠(写真1)が祀られている。祠の中(写真2)には、「愛宕…」と墨書した木札とともに、白馬に乗った像が納められている。愛宕社の御神体としては、白馬にまたがり、甲冑をまとい、剣を持った勝軍地蔵が多いが、

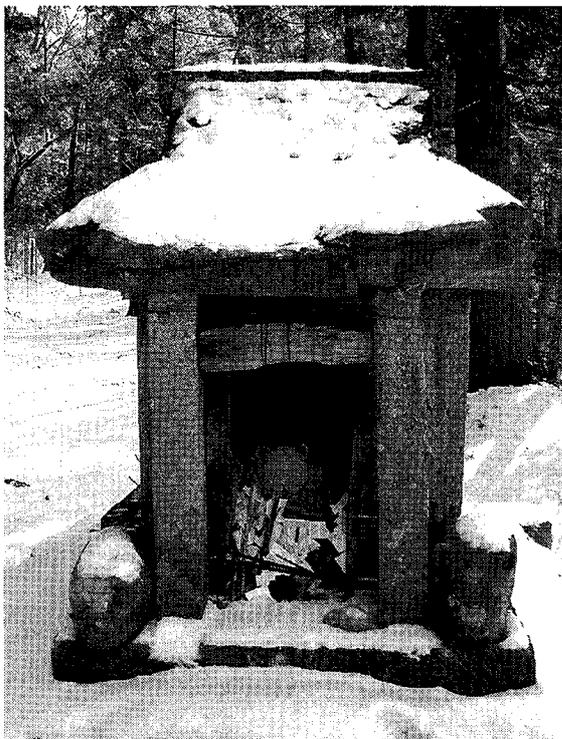


写真1 愛宕神社の祠 (白石市小原)

愛宕信仰の地域的展開

この像は騎乗しているものの、甲冑ではなく鮮やかな彩色の跡を示す衣をまといっており、また手にも何も持っておらず、像容が大きく異なっていることが分かる。氏子総代の高橋文男氏によれば、小原の愛宕神社は、「イクサ神」として信仰されており、戦争中は、無事に帰ってこられるようにと祈願が行なわれた。また近年では選挙の折にも祈願されており、小原は約五百戸の集落だが、白石市議会議員選挙において三人立候補し、いずれも見事当選したという。愛宕神社は契約講と呼ばれる十三軒程の講中で運営され、旧三月二十四日(現在は四月第四日曜)に「百矢納め」という神事が行なわれる。これは小原地区の他四神社にも共通する神事で、天下泰平・家内安全・武運長久・五穀豊穡を祈って、百本の矢を射るもので、あるいは「イクサ神」愛宕神社に大きく関連するものかも知れない。

前述の小字名の箇所には、神社のようなものは現在ないというが、その理由として、片倉家が尊崇した白石城下蔵本の愛宕社の退転が考えられる。明治維新によって片倉家とその家臣団は解体し、大きな庇護者を失った愛宕社は、御神体とされた厨子入の懸守も一旦流出してしまふ憂き目を見る。後に買い戻されたが、明治二十二年(二九八九)に片倉家によって引き取られ、同三十三年には、社殿が白石城そばの神明社の神楽殿となり、更に同四十五年六月には完全に神明社に合祀されることとなる。⁽⁵⁾ 大きな擁護者たる片倉家の引き上げとともに、一門の繁栄・家中の静謐を願った愛宕社の権威も薄れ、祀られなくなってしまうのだろうか。

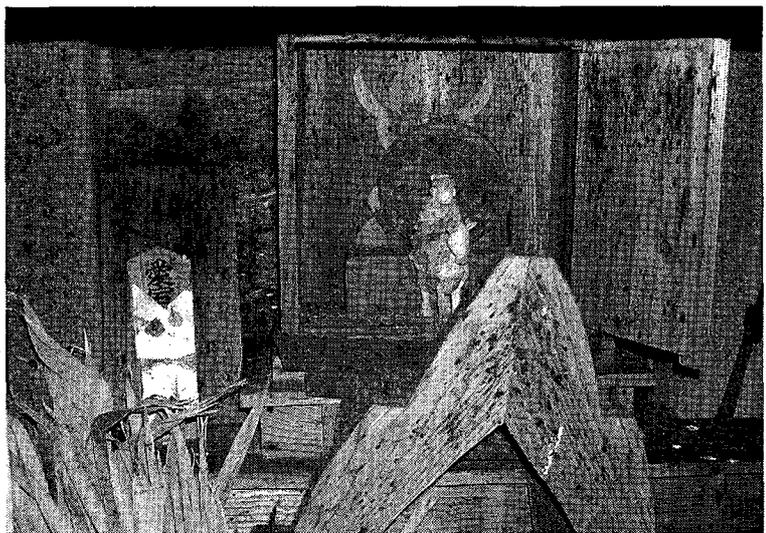


写真2 愛宕神社の御神体 (白石市小原)

四 白石周辺の愛宕信仰

前章で述べた片倉家領では、領主の神たる愛宕神社が広がったようだが、その名残は地名にしか残っていないことが分かった。しかし、現在も残る小原の愛宕神社では、興味深いことに「イクサ神」として祀られており、関西圏のような火伏の信仰ではないことに注目したい。

宮城県内には、『宮城県神社名鑑』によると三十一の愛宕神社がある(表1)。その内、白石市の隣にある刈田かつた郡七ヶ宿ぐんしちがしゆくの愛宕神社をたずね、地元の和田達氏にご案内いただいた。七ヶ宿の愛宕神社も小高い山上にあり、登拝口には鳥居が立てられ(写真3)、山頂には立派な社殿が建てられている(写真4)。社殿内にお祀りされるご神体は、やはり白馬にまたがった像で、小原の愛宕神社と同様に美しく彩色された、東帯のような衣装をまとうている。やはりこれも関西圏とは異なる像容である。現在この社は滑津地区なまづ七十八戸でお守りしており、毎年五月三日と九月十五日に祭礼が行なわれ、村の鎮守神という扱いで火伏の利益ということは聞かれなかった。また、本殿内に多数棟札が残されているが(表2)、例えば天保十四年(一八四三)六月二十四日の愛宕堂修復の棟札(写真5)には、「天下泰平・日月清明・風雨順時・五穀成熟・万民豊楽・氏子繁盛・息宇延命・諸願成就・皆全満足」などと書かれ、前述の片倉家の尊崇した白石城下の愛宕社と同じく、火伏ではなく一般的な村内の静謐や豊作を祈るものであった。かろうじて一枚だけ、昭和六十年に神輿が奉獻された際「一天四海・国土安穩・心願成就」に混ざって「火盜消除」が挙げられるが、一枚だけということもあり、やはり近世より火伏の神としての位置付けはなかったと考えてよいだろう。

愛宕信仰の地域的展開

信仰の性格が関西圏と異なる理由として挙げられるのは、中世から近世初期にかけて、京都の愛宕社でも未だ火伏の信仰が本格化していなかった時に、軍神あるいは鎮守神として主に勧請されてきたことが考えられる。その性格が固定していたため、後にあえて火伏の利益をうたう必要がなかったのではないだろうか。白石城の片倉氏が京都の愛宕社と絵馬修復を通じて関係を保ち、火伏の神としての性格を持つようになったことは十分承知していたのにも関わらず、城下の蔵本の愛宕社にその利益を付け加えることをしなかったのがよい証拠である。また現在、白石市内における火伏の信仰として、秋葉神社や古峰原の古峰神社に対する講があり、十年に一度参拝

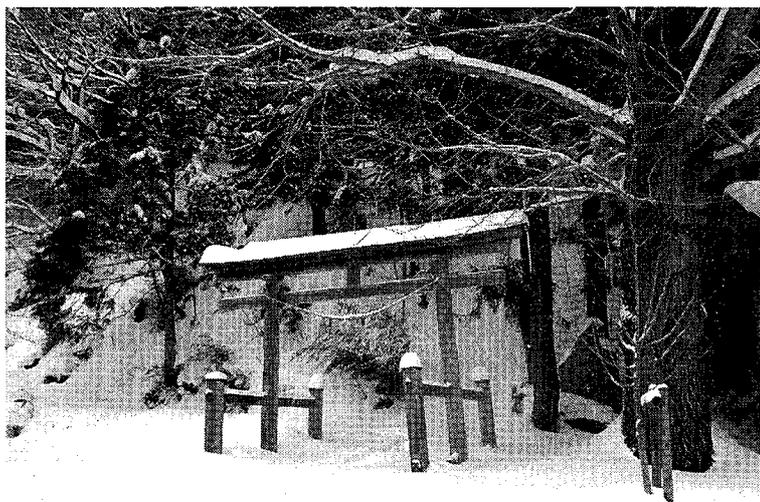


写真3 愛宕神社の鳥居 (刈田郡七ヶ宿)

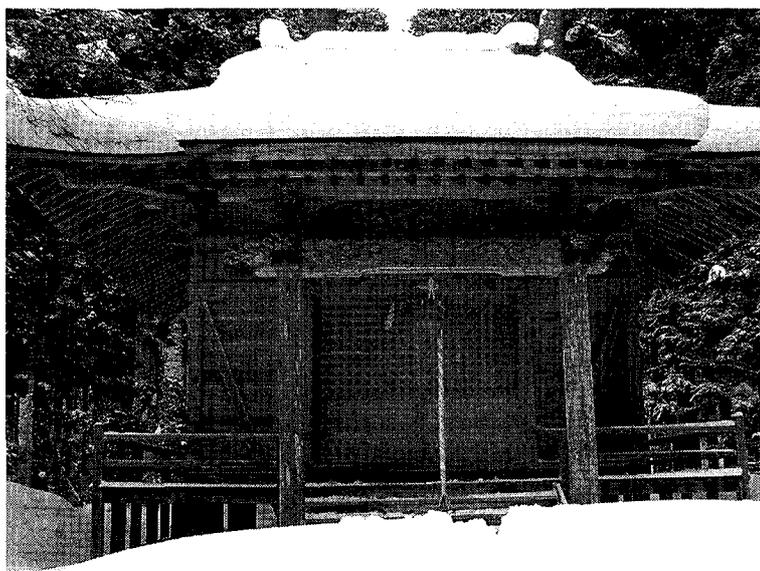


写真4 愛宕神社本殿 (刈田郡七ヶ宿)

愛宕神社

由 緒	そ の 他
伊達政宗創祀	向山の愛宕神社の前身。以後分霊を祀る
米沢の愛宕社に、永禄年間伊達晴宗が誓願寺尊勝に命じて、本地仏を安置させる。伊達政宗の移動とともに岩出山、仙台と遷座。二代藩主忠宗の時に愛宕山へ移された	仙台における総鎮守。 3代藩主伊達綱宗、自筆の絵馬2面奉納。 5代吉村、祭田30石・勝軍地藏像・勝軍地藏画像・自書の額寄進(正徳5)
勧請年不明	火防の神、辰巳生まれの守護神として崇敬
天正年中創祀	元禄2年、享保5年社殿改築。俗に地藏さまと称す
豊室滝ノ沢山に鎮座ありしを康応元年(1389)当地に遷座と伝える	十二代将軍徳川家慶、奥羽地方巡見の折に代参させ、武運長久の祈願を行なう。承応2年(1653)、角田地頭石川宗弘社殿再築。万延元年石川右衛門源義光神殿造営
由緒不明	伝慶長18年再建
康平7年(1064)源義家、京都の愛宕神社分霊を勧請	正平年間炎上、永正年間社殿造営
由緒不詳	
由緒不詳	
天文23年、山城国愛宕山より分霊	
由緒不詳	大内の鎮守
由緒不詳	
下総国館山大楯城主細目修理亮の勧請と伝わる	
伊達政宗祖父種宗、天文17年(1548)6月24日丸山館に隠居の際建立	

愛宕信仰の地域的展開

表1 宮城県の

	所 在	祭 神	祭 日
仙台市	十二軒町	火産霊神	例祭 6月23日
	向山4-17-1	軻遇突智命・天照大神 ・豊受大神ほか九神	鎮火祭 2月24日 例祭 7月24日
塩釜市	和泉ヶ岡11番街区	軻遇突智命	例祭 旧6月24日
古川市	桑針 9	迦具土神	例祭 6月24日
角田市	横倉字馬場内51	軻遇突智命	例祭 4月24日 夏祭 6月24日
	笠島字八幡10	火産霊神	例祭 4月15日
岩沼市	下の郷上中筋76	軻遇突智命、伊弉册尊	例祭 4月24日 夏祭 8月23日
泉 市	七北田字野山11	軻遇突智命	例祭 6月24日
刈田郡	蔵王町大字平沢字立目湯	軻遇土神	
	七ヶ宿町字浦山41	火産霊神	
伊具郡	丸森町大内字中山89	火産霊神	例祭 旧6月24日 花祭 旧3月24日 鎮火祭 旧12月末 又は1月初
	丸森町大内字田林13	火産霊神	例祭 4月24日
	丸森町館矢間館山字大門	軻遇土神	例祭 4月18日
	丸森町字渊上18	火之迦具土神	例祭 旧7月24日

由緒不詳	
創祀年月不明	遠藤盛継城跡にあり。同家の守護神と伝わる
長保2年(1000)創祀と伝える	
栗駒山登山口に「をど神社」としてあったものを、慶長元年当地に遷座して愛宕大権現と改称	
康平5年(1062)源頼義勧請と伝える	源義経が阿弥陀経・法華三部の経文を埋めた経塚を築き、武運を祈請した(『安永風土記』)
葛西氏家臣三浦家房勧請と伝える	
由緒不詳	
慶安3年(1650)創祀	
日本武尊東征の際、山頂に火産霊神を祀る	大宝2年、三宅某社殿造営。元久2年(1205)藤原貞永再興して神主となる。元禄2年邑主笠原実康社殿修営
寛永7年岩手県永井村常性院7世慶宥勧請	文化14年社殿再営
本吉郡相川城主武山直光息道直、慶安4年仮宮建立	延宝8年本殿建立
弘安9年(1286)領主三浦対馬の勧請	後荒廃せるを寛保2年肝煎与右衛門再興
	不動を祀り不動さまと呼んでいたが、明治のはじめ現社号に改める
由緒不詳	
寛永5年片倉重長新田開発の際、白石より分祀	
寛永5年片倉重長、大須新田開発の際、山城の愛宕神社を勧請	祭典には相撲・剣術・柔術の神前試合あり、神輿渡御あり
由緒不詳	

愛宕信仰の地域的展開

宮城郡	松島町手樽字三浦91	軻遇突智命	例祭 旧6月24日
志田郡	松山町金谷字前沢59	軻遇土神	例祭 旧6月24日
栗原郡	栗駒町姫松字芋塚小山崎	軻遇突智命	例祭 旧8月24日
	栗駒町字文字上葛峯前58	軻遇突智命	例祭 旧7月24日
	一迫町字萩生35	軻遇突智神	例祭 7月24日
	若柳町字大林町裏218	軻遇突智命	例祭 旧8月24日
	若柳町字川南二又323	軻遇突智命	例祭 9月24日
	金成町沢辺字館下78	火産霊神、伊弉册尊	例祭 旧7月24日
登米郡	中田町石森字白字226	火産霊神	例祭 6月24日
	中田町上沼字弥勒寺寺山	軻遇突智命	例祭 旧3月、9月24日
	豊里町赤生津山通寿崎	軻遇突智命	例祭 旧9月24日
	迫町森字堤167	軻遇突智命	例祭 6月24日
桃生郡	河南町須江字沢田61	迦具土神	例祭 9月28日
	河南町広渕字鹿添216	火産霊神	例祭 6月24日
	河南町広渕字新田134	軻遇土神	例祭 6月24日
	北上町橋浦字大須656	火産霊神	
	鳴瀬町大字牛綱字鷹ノ巢山	迦具土神	例祭 6月24日

表2 愛宕神社の棟札

No	契機	年記	祈願
1	奉愛宕堂修復屋根替	天保14年(1843)6月24日	天下泰平 日月時明 風雨順時 五穀成熟 万民豊楽 氏子繁昌 息宇延命 諸願成就 皆全満足
2	奉開眼愛宕山鳥居再建	安政4年(1857)6月24日	一天四海 安穩泰平 国家繁荣 降魔別除 百穀豊饒 白綿満足
3	奉再彫刻開眼愛宕山大権現村内擁護所	【江戸時代】	天長地久 聖主万安 日月晴明 風雨順時 国領二君 武運長久 五穀成就 万民豊楽
4	奉開眼愛宕大権現幡幕壺張	【江戸時代】	天長地久 国主聖帝 国領式君 風雨順時 五穀成就 万民豊楽
5	奉再建村社愛宕神社御幡一流	明治21年(1888)6月24日	一天泰平 四海平定 百穀豊登 幽冥祈康
6	奉開眼鎮守愛宕神社敷板御張替	明治36年(1903)6月24日	安穩泰平 聖朝平然 五穀豊穰 養蚕安楽 村内静康 悪事退散
7	奉開眼愛宕神社御幡再建	【明治時代】	一天四海 国土泰平 諸願成就 属具豊饒
8	奉開眼愛宕神社御鳥居修復	【明治時代】	一天泰平 四海平定 百穀豊登 幽冥祈康
9	奉献愛宕神社御幡幕一間方	大正8年(1919)6月24日	一天四海 国土平穩 聖主万歳 百僚安寧 火盗消除 五穀豊穰
10	奉遷宮愛宕神社御屋根葺替	大正11年(1922)旧6月吉日	一天四海 国土静謐 聖主万歳 百僚安寧 風雨順時 蚕穀豊饒
11	奉献納愛宕神社御神鈴壺個	昭和4年(1929)旧6月24日	一天四海 国土安穩
12	奉献納愛宕神社胴長太鼓	【昭和初期】	皇軍戦勝 武運長久
13	奉遷宮鎮守愛宕神社御屋根葺替	昭和55年(1980)6月24日	一天泰平 四海平然 聖主安寧 百官父康 風雨順時 穀蚕能成 氏子安全 信徒無災
14	奉遷宮愛宕神社御屋根改修	昭和56年(1981)7月24日	一天四海 万民豊楽 村内安全 五穀豊穰
15	奉献愛宕神社大幟壺封	昭和59年(1984)9月15日	天下太平 五穀豊穰 攘災招福 万民豊楽
16	奉献愛宕神社神輿壺宇	昭和60年(1985)9月15日	一天四海 国土安穩 火盗消除 心願成就
17	奉献愛宕神社大鳥居全面改修	昭和62年(1987)5月3日	五穀豊穰 諸災退散

愛宕信仰の地域的展開

し、帰ると碑を建てるなど、競合する火伏の信仰が別にあつたことも大きな理由であろう。

では、宮城県内では火伏の利益をうたう愛宕神社がないのか、といえば実はそうではなく、塩釜市和泉ヶ岡では「火防護」を掲げているし、仙台市向山(写真6)でも毎年二月十四日に古式にのつとつた鎮火祭を執り行い、火防護をうたう。特に向山の愛宕神社では、明治期に御神体たる勝軍地蔵の掛軸(写真7)が仙台市周辺の郡部に配られ、各地では愛宕講が結成され、毎年旧六月の参拝が続けられている。しかし、これらの信仰もいつまで遡ることができるか、きちんと調査できておらず、或いは明治の神仏分離以降に信仰についても再編された可能



写真5 愛宕神社の棟札(刈田郡七ヶ宿)
(右:表、左:裏)

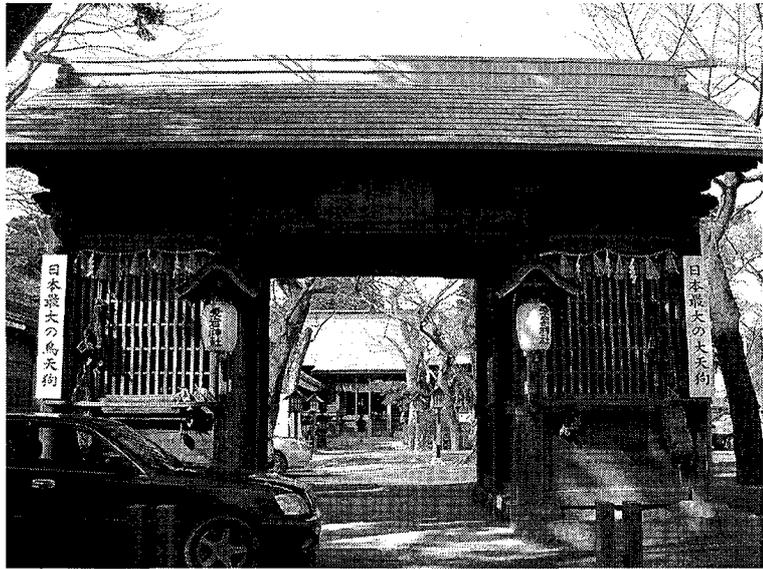


写真6 愛宕神社(仙台市向山)



写真7 愛宕神社で頒布される勝軍地蔵の掛軸（仙台市向山）

性もある。

また、宮城県内の愛宕神社の由緒には、平安後期に前九年の役や後三年の役を通して東北地方に地歩を固めた源頼義・源義家、奥州に逃げてきた源義経ら源氏をあてるところもあり、これらの伝承がどれだけ信頼できるかは分からないが、近世の火伏信仰の隆盛や戦国時代の軍神信仰による愛宕神社の広がり以外の伝播時期を考えてみる必要があるかも知れない。

白石市周辺の愛宕信仰は、軍神信仰として祀った片倉家の影響を受け、火伏の信仰は見られなかった。このことから、全国に展開する愛宕神社の信仰は、決して同じ信仰ではないことが分かり、愛宕神社の信仰の展開については、各地域における個別の事例を収集しつつ考えていかなければならないだろう。

最後に、今回の調査でお世話になった、白石市教育委員会の遠藤修身氏、白石市文化財保護委員の中橋省吾氏、白石市図書館長の平間啓子氏、小原百矢おさめ神事代表の小泉国江氏、小原愛宕神社総代の高橋文男氏、和田達氏に、あらためてお礼を申し上げたい。

愛宕信仰の地域的展開

注

- (1) 八木透・原島知子「東北の愛宕信仰―片倉家関連資料調査報告―」(『アジア宗教文化情報研究所研究紀要』創刊号 二〇〇五)
- (2) 片倉重綱と愛宕山との関係は、片倉信光「愛宕権現のお使獣「猪」の絵馬―京都愛宕山へ片倉小十郎奉額―」(『仙臺郷土研究』第19巻第1号 仙台郷土研究会 一九五九)に詳しくまとめられているので、それを参考とした。
- (3) 宮城県立図書館蔵の絵馬の下図では、願主が「重綱」とされている。重綱の名は正保二年、四代將軍徳川家綱の名をはばかって重長とあらためているので、寛文の修復時に奉納絵馬の願主名はあらためられたと考えられる。
- (4) 『片倉代々記』元和元年九月条
- (5) 前掲「愛宕権現のお使獣「猪」の絵馬」、『白石市史』第1巻通史編別刷「白石市史年表」
- (6) 『白石市史』3の(2)特別史(下)の1「地名の研究」
- (7) 小原弓道会編『白石市小原地区に残る神事 百矢納め』